推薦の言葉
――本書の意義について――

本書は、中国に住む朝鮮族（中国朝鮮族）が使用する朝鮮語を対象としている。中国朝鮮族の朝鮮語は、中国における少数民族の言語、朝鮮語の地域的な一変種、中国に移り住んだ人々の移民言語、など様々な姿を持っている。本書は、談話資料やアンケート調査資料を詳細に分析することにより、中国朝鮮族の朝鮮語の持つ様々な姿を整理し、その全体像を示そうとする大変意欲的な研究である。

筆者自らも述べているが、様々な世代、地域の使用言語を調べ、さらに言語使用意識についての調査も行い、中国朝鮮族の言語の全体像に迫ろうとした研究はこれまでになかった。調べたいと考えた研究者はいたかもしれないが（実は私も調べたいと思った一人である）、調べるためには様々な知識と能力が必要である。中国朝鮮族の多くは 19 世紀末から 20 世紀初めにかけて、朝鮮半島のいくつかの地域から中国東北部に移り住んだ。そのため、彼らの朝鮮語には以前居住していた地域の方言の特徴が残っており、それに中国語の影響が加わり、さらに近年は韓国で使用されている言葉（韓国語）の影響も受けるようになっている。つまり、彼らの言語を調べ正確な分析を行うためには、方言も含めた朝鮮語の知識と言語能力、そして中国語に関する知識と言語能力が必要なのである。こういう調査は研究チームを組織して行うしかないだろうと考えていたが、驚くべきことに、その調査を一人だけで、なおかつ朝鮮語や中国語のネイティブでもない若き研究者が行ったのである。筆者である髙木氏がこの研究をなし得たのは、彼が調査に必要な知識と能力を身につけていたからであり、研究の成果とともに、彼のこれまでの研鑽に拍手を送りたい。

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

高木氏の研究の特徴は、中国朝鮮族の朝鮮語の姿を記述言語学的な観点と社会言語学的な観点、双方から明らかにしようとした点である。彼はいくつかの地域で各年代の談話資料を収集し、その資料をもとに地域ごとの朝鮮語の特徴、年代間の変化を明らかにした。特に、咸鏡道方言、平安道方言、慶尚道方言という基盤となる方言が異なる地域で、同じような調査を行ったことは高く評価すべき点である。ともすれば、こういう調査は方言的な特徴のみに分析の関心が行きがちであるが、その地域の言語の特徴を全体的に把握しようとする姿勢もまた評価したい。方言形式を含む朝鮮語である上、さらに中国語も混じった談話資料の分析には大変な労力が必要であったであろうが、談話資料をもとにしたことがこの研究の信頼性を高めている。

また、言語意識調査を併せて行ったことにより、朝鮮族における朝鮮語の位置づけや将来の展望をより明確に把握することができ、朝鮮語そのものだけでなく、それを取り巻く状況も含めた全体像を示すに至っている。数年の間にこれだけの調査を行ったことについても驚嘆せざるを得ない。バイタリティー溢れる高木氏だからこそできたのあろう。

本書の意義は、朝鮮語学に留まらず、いろいろな分野に貢献するものである。記述的研究におけるデータと分析は、言語接触による言語の変化を考える上で、貴重なものになるであろうし、社会言語学的研究は、少数言語、あるいは移民言語の変化を捉える上で、重要な指摘となろう。しかし、これで研究が完成したわけではない。対象とする話者の数や地域を増やせば、より厚みのある分析となろうし、経年的な調査を行えば変化の実態を明確に示すことができるであろう。筆者にはさらなる研究の進展を期待したい。

2019 年 6 月 30 日

東京大学大学院総合文化研究科教授　**生越直樹**

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

目　次

推薦の言葉——本書の意義について——　生越直樹 i

図表目次 xi

序　章　中国朝鮮語研究への招待 1

0.1.　研究背景 1

0.2.　研究の前提 5

0.2.1.　言語名 5

0.2.2.　変種名 6

【言語使用編】

第 1 章　延辺朝鮮語における終止形語尾の社会言語学的考察 11

1.1.　はじめに 11

1.2.　先行研究 12

1.3.　研究の枠組み 17

1.3.1.　待遇法体系 17

1.3.2.　調査の概要 19

1.3.3.　文字化の方法 21

1.4.　分析 22

1.4.1.　上称の終止形語尾 23

1.4.1.1.　-ㅁ다/습다、-ㅁ가/습가? 25

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

1.4.1.2. -ㅂ데다/습데다.....26　1.4.1.3. -꾸마/스꾸마.....26
1.4.1.4. -ㅁ두/슴두?.....27
1.4.2. 中称の終止形語尾.....28
1.4.2.1. -오/소.....28　1.4.2.2. -ㅂ데/습데.....31
1.4.3. 略待上称の終止形語尾.....32
1.4.4. 下称の終止形語尾.....33
1.4.4.1. -다.....34　1.4.4.2. -재.....35
1.4.4.3. -니?、-야?.....36　1.4.4.4. -아/어?.....38
1.4.4.5. -는/(으)ㄴ매.....39
1.4.5. 略待の終止形語尾.....39
1.4.5.1. -지.....41　1.4.5.2. -아/어.....42　1.4.5.3. -지무.....42
1.4.6. 親疎関係、話者の属性による待遇法の出現.....43
1.5. 小結.....46

第2章　延辺朝鮮語の終止形語尾 -재に関する一考察.....49

2.1. はじめに.....49
2.2. 先行研究.....49
2.2.1. -재.....50
2.2.2. -잖아(요).....50
2.3. 研究の枠組み.....52
2.3.1. 終止形語尾としての -재の形成.....53
2.3.2. 調査の概要.....54
2.4. 分析.....54
2.4.1. 結合規則.....54
2.4.1.1. 用言との結合.....54　2.4.1.2. 接尾辞との結合.....55
2.4.2. 使用域.....56
2.4.3. 意味機能.....56

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

2.4.3.1. 確認、同調要求 .....57 2.4.3.2. 話題誘導 59
2.4.3.3. 反論、忠告 .....61 2.4.3.4. 理由、根拠 62
2.4.3.5. 状況 63
2.5. 小結 64

第3章 遼寧省朝鮮語における友人談話の発話形式
——基層方言との関係という観点から—— 67

3.1. はじめに 67
3.2. 先行研究 68
3.2.1. 平安道方言 68
3.2.2. 中国朝鮮語 69
3.3. 研究の枠組み 74
3.4. 分析 76
3.4.1. 平安道方言を保持した形式 77
3.4.1.1. 終止形語尾 .....77 3.4.1.2. 活用形 82
3.4.2. 遼寧省朝鮮語に特徴的な形式 86
3.4.2.1. 終止形語尾 .....86 3.4.2.2. 活用形 88
3.5. 小結 92

第4章 遼寧省朝鮮語における中老年層談話の発話形式
——終止形語尾の出現に注目して—— 97

4.1. はじめに 97
4.2. 研究の枠組み 98
4.3. 分析 100
4.3.1. 中称の終止形語尾 101
4.3.1.1. -오/소.....102 4.3.1.2. -다우.....103
4.3.1.3. -우다/수다.....104 4.3.1.4. -무다/스무다.....105
4.3.1.5. -자요.....105 4.3.1.6. -(으)라요.....106

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

4.3.2. 略待上称の終止形語尾 106
4.3.2.1. -아요/어요/이요 ..... 107　4.3.2.2. -디요, 지요 107
4.3.3. 下称の終止形語尾 107
4.3.3.1. -다 ..... 108　4.3.3.2. -안/언?、-간?、-던? 109
4.3.3.3. -네?, -니? ..... 110　4.3.3.4. -가? 110
4.3.3.5. -(으)라 ..... 111　4.3.3.6. -(으)라우 111
4.3.4. 略待の終止形語尾 111
4.3.4.1. -아/어 ..... 112　4.3.4.2. -디, -지 112
4.4. 終止形語尾の使用 113
4.4.1. 中称・平叙形 113
4.4.2. 中称・命令形 114
4.4.3. 中称・勧誘形 115
4.4.4. 下称・疑問形 115
4.5. 小結 116

第5章 ハイブリッド言語としての黒龍江省朝鮮語 119

5.1. はじめに 119
5.2. 先行研究 120
5.2.1. 黒龍江省朝鮮語 120
5.2.2. 言語接触 122
5.3. 研究の枠組み 123
5.4. 分析 125
5.4.1. 慶尚道方言 125
5.4.1.1. 音韻 ..... 125　5.4.1.2. 語彙 ..... 127　5.4.1.3. 文法 128
5.4.2. 中国朝鮮語 131
5.4.2.1. 語彙 131
5.4.3. 韓国語 132

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

5.4.3.1.　音韻 .....133　5.4.3.2.　語彙 .....133　5.4.3.3.　文法 134
5.4.4.　朝鮮語の他方言 135
5.4.4.1.　音韻 .....136　5.4.4.2.　語彙 .....136　5.4.4.3.　文法 137
5.4.5.　漢語 138
5.4.5.1.　音韻 .....138　5.4.5.2.　語彙 .....139　5.4.5.3.　文法 141
5.4.6.　誤用 141
5.4.7.　コード・スイッチング 143
5.4.7.1.　文脈的要因 .....143　5.4.7.2.　統語的要因 147
5.5.　小結 150

第6章　黒龍江省朝鮮語における中老年層談話の発話形式
――基層方言の出現に注目して―― 153

6.1.　はじめに 153
6.2.　研究の枠組み 154
6.3.　分析 155
6.3.1.　音韻 155
6.3.2.　語彙 156
6.3.3.　文法 157
6.4.　小結 160

第7章　中国朝鮮語話者と韓国語話者の接触場面における談話の特徴
.....163

7.1.　はじめに 163
7.2.　先行研究 164
7.3.　研究の枠組み 166
7.4.　分析 167
7.4.1.　中国朝鮮語の使用 167

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

7.4.1.1.　語彙 .....168　　7.4.1.2.　文法 170
7.4.2.　相互作用／談話展開上の特徴 174
7.4.2.1.　韓国語への適応 .....175　　7.4.2.2.　朝鮮語能力の欠如 178
7.5.　小結 180

第 8 章　中国朝鮮族高校生の朝鮮語書きことばに関する一考察 183

8.1.　はじめに 183
8.2.　研究の枠組み 183
8.2.1.　誤用と特徴 183
8.2.2.　調査の概要 184
8.3.　分析 185
8.3.1.　誤用分析 186
8.3.1.1.　変種的誤用 186
8.3.1.2.　韓国語からの影響による誤用 192
8.3.2.　特徴分析 194
8.3.2.1.　変種的特徴 195
8.3.2.2.　漢語からの影響による特徴 196
8.4.　小結 199

【言語意識編】

第 9 章　中国朝鮮族 第 4、5 世代の言語使用と意識
――主に吉林省の高校における質問紙調査の結果から―― 203

9.1.　はじめに 203
9.2.　先行研究 203
9.3.　研究の枠組み 205

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

9.4.　分析 207
9.4.1.　言語使用 207
9.4.2.　言語意識 214
9.4.2.1.　言語全般に対する意識 214
9.4.2.2.　朝鮮語に対する意識 219
9.4.2.3.　韓国語に対する意識 224
9.5.　小結 228

第 10 章　遼寧省朝鮮語話者の言語使用と意識
――瀋陽市朝鮮族高校における質問紙調査の結果から―― 231

10.1.　はじめに 231
10.2.　先行研究 231
10.3.　研究の枠組み 232
10.4.　分析 233
10.4.1.　言語意識 233
10.4.1.1.　朝鮮語に対する意識 233
10.4.1.2.　韓国語に対する意識 235
10.4.1.3.　朝鮮語と韓国語に対する意識 238
10.4.2.　言語使用と言語使用に対する意識 239
10.5.　小結 242

第 11 章　黒龍江省朝鮮語話者の言語使用と意識
――哈爾浜市朝鮮族中学校、高校における質問紙調査の結果から―― 243

11.1.　はじめに 243
11.2.　研究の枠組み 243
11.3.　分析 245
11.3.1.　言語使用 245
11.3.2.　言語意識 248

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

11.3.2.1.　言語全般に対する意識 248
11.3.2.2.　朝鮮語と韓国語に対する意識 251
11.4.　小結 253

第 12 章　在外朝鮮族の言語使用と意識
――北京市、広東省、京畿道在住者の比較から―― 255

12.1.　はじめに 255
12.2.　先行研究 256
12.2.1.　中国国内 256
12.2.2.　韓国国内 257
12.3.　研究の枠組み 258
12.4.　分析 259
12.4.1.　言語環境 259
12.4.2.　言語使用 264
12.4.3.　言語意識 268
12.5.　小結 273

終　章　結論 277

参考文献一覧 287
初出一覧 305

終わりに 309

【付録】　1 周辺地域の地図 .....315　2 質問紙調査票 318

日本語索引 325
朝鮮語索引 330

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

序　章

中国朝鮮語研究への招待

0.1.　研究背景

中国東北地方（吉林省、遼寧省、黒龍江省）には、日常の言語生活において朝鮮語を使用する人々が多く居住している。彼らは中国における少数民族政策で「朝鮮族」と規定される民族で、主に19世紀中葉から1940年代にかけて貧困や戦乱、日本による支配などを理由に朝鮮半島から移住した人々の末裔である[1]。国务院人口普查办公室 他（2012）（『中国 2010年人口普查资料』（中国 第6回人口センサス））によると、朝鮮族は中国全体で約183万の人口を有しており、朝鮮半島以外における朝鮮語話者数としては、在米コリアンに次いで2番目に多い人口規模となっている[2]。

1　朝鮮半島から中国への移住史を言語学的見地から扱ったものとしては、북경대학 조선문화연구소（1995）、전학석（2005）、宮下尚子（2007）、김광수（2014b）などがある。このうち、전학석（2005）では、朝鮮半島から中国への移住史は、(1) 元王朝末期から明王朝初期、(2) 明王朝末期から清王朝初期、(3) 清王朝末期から1940年代までの3つの時期に分けることができるとしている。ただし、(1)、(2) の時期に移住した人々の末裔は、大部分が中国内の他民族に同化しており、少なくとも朝鮮語を話すことはできない。よって、共時態としての中国朝鮮語の方言分布を分析する際に重要な移住時期は、(3) ということになる。

2　在米コリアンとはアメリカ合衆国に居住する朝鮮民族（圧倒的、大多数が韓国からの移民）を指し、2017年における総人口は約249万人である（외교부（2017））。ところで、朝鮮族の集住地域である吉林省、黒龍江省、遼寧省は、併せて「東北3省」と称されることがある。国务院人口普查办公室 他（2012）によると、東北3省における朝鮮族の人口

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第 1 章

延辺朝鮮語における
終止形語尾の社会言語学的考察

1.1.　はじめに

本章と次章では、中国朝鮮語の中でも最大の話者人口を持つ吉林省 延辺朝鮮族自治州における朝鮮語（以下、延辺朝鮮語）の言語的特徴について分析を行なう。延辺朝鮮語については、菅野裕臣（1982）、중국조선어실태조사보고 집필조（1985）、문창덕（1990）、렴광호（1990）、梅田博之（1993）、북경대학 조선문화연구소（1995）、전학석（1996, 1998）、최명옥 외（2002）、곽충구 외（2008）、방채암（2008）、정향란（2010）、고홍희（2011）、김선희（2013）、김순희（2014）、남명옥（2014）、柴公也（2015）、오선화（2015）、髙木丈也（2015c, 2016bc, 2017ab, 2018ade）などいくつかの研究が存在しており、その実態が一部、解明されつつある。しかし、一連の論考をみてみると、その多くは助詞や語尾について形態・統語論的観点から記述するに留まっており、当該形式が実際の談話場面においてどのように使用されているかを社会言語学的観点から分析したものは、そう多くない。そこで、本章ではこうした状況に鑑み、延辺朝鮮語の談話における終止形語尾の使用様相を親疎関係や話者の属性といった社会言語学的要因から分析することにする[1]。本

1　韓国で종결어미（終結語尾）、中国や北朝鮮で맺음토（－吐）、종결토（終結吐）と呼ばれる文法範疇を本書では以降、「終止形語尾」と呼ぶことにする（中国や北朝鮮で用い

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第2章

延辺朝鮮語の終止形語尾 -재に関する一考察

2.1. はじめに

第1章では、延辺朝鮮語の談話における終止形語尾の使用様相について、親疎関係や話者の属性といった社会言語学的観点から分析を行なった。その結果、延辺朝鮮語では他方言にはみられない融合、脱落により生成された形式が多いことが確認されたが、その中でも特に【接尾辞】＋【-니?、-야?類】の融合形は、-재（＜-죙/재- ＋ -니?、-야類)、-개?（＜-갯- ＋ -니?、-야?類)、-대?（＜-더- ＋ -니?、-야?類)、-래?（＜-라- ＋ -니?、-야?類)、-아/어?（＜-앗/엇- ＋ -니?、-야?類）など多様な語尾が使用されていることが確認された。こうした語尾に関する詳細な分析もまた共時態としての延辺朝鮮語の記述において必要なものとなるが、先行研究をみると、当該変種に特徴的な語尾について、その意味・機能を深く分析した論考は依然として少ないことがわかる。そこで本章では、上記の終止形語尾のうち-재を取り上げ、その使用様相を分析してみようと思う。本章の分析により、延辺朝鮮語に特徴的な終止形語尾が他変種との比較においていかなる普遍性と特殊性を持つのかが、明らかになるものと期待される。

2.2. 先行研究

本章では、先行研究における-재に関する記述をみる。-재について分析

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第3章

遼寧省朝鮮語における友人談話の発話形式
――基層方言との関係という観点から――

3.1. はじめに

第1章、第2章では、自治州が置かれる吉林省延吉市に居住する話者の談話をもとに延辺朝鮮語の終止形語尾について分析を行なった。そこで分析した談話は主に咸鏡道方言を基層とする変種であったが、序章脚注2でもみたように朝鮮族は自治州のみならず東北3省の広範な地域に分散して居住しており、中国朝鮮語の特性を理解するためには延辺朝鮮語以外の変種に対する記述も不可欠である。しかし、その一方で既存の論考は最大人口を擁する延辺朝鮮語を扱ったものが圧倒的に多く、他地域の変種を扱った論考は極めて少ないのが現状である。延辺以外の地域に居住する朝鮮族の言語使用は、基層方言や他方言との比較において、いかなる普遍性と特殊性を示すのであろうか。本章と次章では、これを解明するための手がかりとして、東北3省の中でも平安道方言を基層とする話者が多いとされる遼寧省[1]における朝鮮語

1　序章でみたように、遼寧省の朝鮮族の人口は239,537人で、吉林省（1,040,167人）、黒龍江省（327,806人）に続き、中国国内では3番目に多い人口を擁する省である（国务院人口普查办公室 他（2012））。当地域における朝鮮族の移住世代の出身地は地理的な近さから平安道が多いが、慶尚道出身者も一定数、存在している（実際に筆者が2015年夏に瀋陽市 蘇家屯（소사툰）区 新興屯（신흥툰）、花園新村（화원신촌）を訪問した際には、複数の慶尚道方言話者に出会った）。

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第4章

遼寧省朝鮮語における中老年層談話の発話形式
――終止形語尾の出現に注目して――

4.1.　はじめに

第3章では、瀋陽市、丹東市において実施した調査をもとに遼寧省朝鮮語の友人談話における発話形式について、用言の活用形を中心に分析を行なった。一連の分析により、当地域において平安道方言を保持した終止形語尾の中には、おおよそ移住第2世代である70代を下限にそれ以下の世代では出現が確認されないものが存在しており、下称・疑問形の -안/언? や -간?、口蓋音化を伴わない -디? といった語尾は、近い将来、消滅するであろうことを示した。これらの分析により、当地域の特に中老年層談話の記述は言語学界における至急の課題であることが示唆されたが、近年の研究を眺めてみると、平安道方言使用地域に関する言語記述は依然として極めて少ないのが現状である。そこで、本章では第3章で十分に考察ができなかった非都市部（農村部）の中老年層の談話に現れる終止形語尾について、新たに採録した談話資料をもとに、より深層的な分析を行ないたいと思う[1]。本章の分析により、中老年層の平安道方言使用話者の談話における基層方言の保存程度がよ

1　第3章では、遼寧省朝鮮語の友人談話における用言の活用形について、基層方言を保持した形式、当地域に特徴的な形式という観点から分析したため、終止形語尾のみならず接続形語尾、連体形語尾についても幅広く扱ったが、本章ではこのうち第3章で特に大きな世代差が確認された終止形語尾に焦点を当てて分析することにする。

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第5章

ハイブリッド言語としての黒龍江省朝鮮語

5.1. はじめに

第4章まででは、吉林省（延辺朝鮮族自治州）や遼寧省（瀋陽市、鴨緑江以北地域）における調査結果をもとに各地の朝鮮語の特徴について分析を行なってきた。本章と次章では、東北3省を構成する今1つの省である黒龍江省[1]で使用される朝鮮語について分析することにする。まず、本章では黒龍江省の中でも尚志市[2]に居住する移住第4、5世代の話者の談話（友人談話）を取り上げ、その言語的特徴を分析する。尚志市在住の朝鮮族は、その多くが慶尚道から移住した人々の末裔である。しかし、その一方で同市における

1　序章でみたように、黒龍江省の朝鮮族人口は327,806人で、吉林省（1,040,167人）に続き、中国国内では2番目に多い人口を擁する省である（国务院人口普查办公室 他（2012））。当地域における朝鮮族の移住世代は、牡丹江、合江（牡丹江に隣接する地域）には咸鏡道出身者が、松花江（哈爾浜）、綏化、合江（牡丹江に隣接しない地域）には慶尚道出身者が多いとされ（宣德五 他（1985）、북경대학 조선문화연구소（1995））、ひとくちに「黒龍江省朝鮮語」といっても、その基層となる変種は多様であることがわかる。

2　尚志市（상지시, 尚志市［shàngzhìshì］）は、黒龍江省の東南部、張広才嶺の西麓に位置する哈爾浜市下の県級市（1988年9月に県より市に昇格）。河東朝鮮族郷、魚池朝鮮族郷などの朝鮮族居住地域を擁する。2016年末における総人口は、580,291人（상지시 조선민족사 편집위원회, 한득수 주필（2009）によると、同書の刊行当時、尚志市における朝鮮族の人口は20,419人で市総人口の2.4%を占めていたという）。哈爾浜市中心部からの距離は124km（尚志市人民政府 他（2017, 2018））。李文淑（2008）によれば、尚志市 河東郷 南興村の場合、慶尚道からの移住者が9割以上を占めるという。

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第6章

黒龍江省朝鮮語における中老年層談話の発話形式
――基層方言の出現に注目して――

6.1. はじめに

第5章では、黒龍江省 尚志市在住の移住第4、5世代の朝鮮語話者の談話を分析し、当地域では慶尚道方言、中国朝鮮語、韓国語、朝鮮語の他方言、漢語などの影響を受けたハイブリッド化した言語が使用されていることを明らかにした。ここでは同時代の黒龍江省朝鮮語においては、基層方言としての慶尚道方言の影響が相対的に弱まっていることを指摘したが、それはあくまで都市部に居住する若年層の話者を分析対象としたものであり、農村など、より伝統的な集住地域における中老年層の朝鮮語話者の実態は解明することができなかった。遼寧省朝鮮語の分析においてもそうであったように、居住地域の差は言語使用に影響を与えるのだろうか。本章では、黒龍江省の中でもより内陸部に位置する斉斉哈爾市[1] 郊外の朝鮮族集落において実施した調査データをもとに基層方言としての慶尚道方言がどの程度残存している

1　斉斉哈爾市（치치할시, 齐齐哈尔市［qíqíhāěrshì］）は、黒龍江省西北部に位置する直轄市である。市名は「辺境」を意味する満州語に由来すると言われ、新中国成立までは黒龍江地区の中心地であった（新中国成立後に省都が哈爾浜に移転）。同市に位置する扎龍自然保護区には多くの鶴が生息することから「鶴城」とも呼ばれる。1市、8県、7区を管轄し、市の総面積は4.25万㎢、2018年における総人口は570万人（齐齐哈尔市人民政府（2018））。

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第7章

中国朝鮮語話者と韓国語話者の接触場面における談話の特徴

7.1. はじめに

第6章までは、吉林省（延辺朝鮮族自治州）や遼寧省、黒龍江省など、いわゆる東北3省における朝鮮族の言語使用を談話の考察を通して分析してきた。一連の考察により分析変種では、漢語、韓国語など様々な言語、変種の影響を受けつつも当地域に独特な言語形態を発展させてきたことが解明された。談話をもとに言語使用を分析する最後の章となる第7章では、これまでとはやや視点を変えて、韓国に移動した朝鮮族の言語使用を分析してみようと思う。1992年の中韓国交修交以降、朝鮮族は出稼ぎを目的として韓国に中・短期間滞在することが多くなっており、『2019년 2월호 출입국외국인정책 통계월보』（2019年2月号 出入国外国人政策 統計月報、출입국·외국인정책본부（2019））によると、韓国には同月時点で706,595人もの朝鮮族が滞在しているとされている。こうした出稼ぎを可能にしている最も大きな要因として、当然、言語面における意思疎通の利便性をあげることができるが、実際のところ韓国に滞在する朝鮮族が韓国人との間でどのような言語使用を行なっているのかは、ほとんど明らかにされていない状況にある[1]。中国朝鮮

1　言語に関係がある論考として、文学、教育、翻訳、語彙の対照といったものはみられるが、実際の接触場面（談話）を扱ったものは少ない。

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第8章

中国朝鮮族高校生の朝鮮語書きことばに関する一考察

8.1.　はじめに

これまで第7章まででは、中国朝鮮語の談話を対象に定め分析を行なってきたが、【言語使用編】の最後の章となる第8章では、書きことばにおける中国朝鮮語の使用様相を分析することにする。現在、朝鮮族社会は移住第3～5世代が大部分を占めているが、彼らの朝鮮語能力は移住第1、2世代に比べ、相対的に低くなっていることが知られている。そこで本章では、高校生の書きことばの使用状況に焦点を当てて、彼らの言語使用の実態に迫ることにする。本章の分析により、これまでほとんど明らかされてこなかった朝鮮族若年層の文語使用の実態が明らかになるばかりか、それらが学校教育による中国朝鮮語の規範をどの程度反映したものであるか、他言語、他変種との関係において、いかなる特徴をみせるものであるかを解明することも可能になると期待される。

8.2.　研究の枠組み

8.2.1.　誤用と特徴

本章では、朝鮮族高校生の朝鮮語書ことばに関する分析を行なうにあたって、誤用と特徴という2つの観点を取り入れる。前者は中国朝鮮語の言語規

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第9章

中国朝鮮族 第4、5世代の言語使用と意識
――主に吉林省の高校における質問紙調査の結果から――

9.1. はじめに

本章では、朝鮮族高校生の言語使用と意識を分析する。次節でも述べるように既存の朝鮮族の言語（あるいは民族、文化）意識に関する研究は、延辺朝鮮族自治州の中心地である吉林省 延吉市在住者を対象としたものが多かった。しかし、朝鮮族は自治州以外の地域にも分散して居住しており、その言語使用や意識は必ずしも同一ではないことが予想される。そこで本章では、延吉市のみならず（主に吉林省内の）他都市に居住する話者についても広範囲に分析することで、当地域における話者の持つ多様性を解明したいと思う。居住地域の差は朝鮮語話者の言語使用、意識にいかなる影響を与えているのだろうか。本章では、こうした点を他言語や他変種との関係も視野に入れて捉えていくことにする。本章の分析により朝鮮族 第4、5世代が自らの言語をいかに捉え、それが民族アイデンティティとどのように関係しているかを解明することが可能になると考える。

9.2. 先行研究

本章では、吉林省在住の朝鮮族の意識に関連する代表的な先行研究を概観する。なお、言語意識のみを扱った論考は少ないため、ここでは、より広義

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第10章

遼寧省朝鮮語話者の言語使用と意識
――瀋陽市朝鮮族高校における質問紙調査の結果から――

10.1.　はじめに

第9章では、主に吉林省に居住する朝鮮族の言語使用と意識について分析を行なった。本章では、第9章に引き続き、遼寧省朝鮮語の話者である瀋陽市在住の朝鮮族高校生の言語使用と意識について分析を行なう。当地域における学生がいかなる言語意識を持ち、言語使用を行なっているのかを解明することで、中国朝鮮語の多様性により深く接近できるものと考える。

10.2.　先行研究

本章では、吉林省以外に居住する朝鮮族の意識に関連する先行研究を概観する。なお、言語意識のみを扱った論考は少ないため、ここでも9.2.と同様に、より広義に民族、文化に対する意識を併せてみることにする。

金正淑（1998）は、黒龍江省で実施したインタビュー調査をもとに朝鮮人意識の受容と拒否について分析した論考である。これによると、朝鮮族の朝鮮人意識は（1）朝鮮人意識を受容し、漢族文化も吸収する型、（2）朝鮮人意識を拒否し、漢族文化を吸収する型、（3）朝鮮人意識を受容し、漢族文化を拒否する型、（4）朝鮮人意識も漢族文化も拒否する型に大別されるという。

손영（2013）は、遼寧省 丹東市、東港市で実施した質問紙調査、インタ

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第 11 章

黒龍江省朝鮮語話者の言語使用と意識
――哈爾浜市朝鮮族中学校、高校における質問紙調査の結果から――

11.1.　はじめに

第 9 章、第 10 章では、吉林省、遼寧省における朝鮮語話者の言語使用と意識について分析を行なった。本章では、上記の分析に続いて東北 3 省を構成する今 1 つの省である黒龍江省在住の朝鮮語話者の言語使用、意識を分析する。黒龍江省朝鮮語話者は、延辺朝鮮語話者、あるいは遼寧省朝鮮語話者といかなる共通性、あるいは特殊性を示すのか。本章の分析により、その一端が解明されると期待される。

11.2.　研究の枠組み

本章では、筆者が 2018 年 5 月に黒龍江省 哈爾濱市 朝鮮族第一中学[1] の学生 125 人（移住世代から数えて、4、5 世代目の生え抜き）を対象に実施した質問紙調査の結果を分析する。調査地を哈爾浜市としたのは、黒龍江省の省都であり一定数の被験者を確保しやすいため、調査対象者を移住第 4、5 世代に限定したのは、今後の言語使用を担う若年層の話者の言語意識を調査

1　哈爾濱市朝鮮族第一中学は、哈爾浜市 香坊区に位置する 6 年制の中高一貫校で、1947 年に開校した伝統校である。2018 年 5 月現在の同校の学生数は 530 人、教職員数は 93 人。

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第12章

在外朝鮮族の言語使用と意識
――北京市、広東省、京畿道在住者の比較から――

12.1.　はじめに

第7章でも述べたように、近年、朝鮮族は伝統的な集住地域を離れ、中国内の他地域や中国外へと再移住する人々が増えつつある。こうした人口移動を誘発した要因として、1978年以降の中国の改革開放政策に伴う沿海都市の経済発展や1992年の中韓国交修交による労働力需要の増大をあげることができるが、人の移動はモノや金の移動をもたらしたのみならず、言語それ自体の存在様式にも大きな影響を与え、ひいては民族アイデンティティの存続にも少なからぬ影響を与えたであろうと予想される。本章では、こうした人の移動による言語変化という側面に注目したうえで、中国東北3省以外に居住する朝鮮族を「在外朝鮮族」と名付け、彼らの言語使用、意識の特徴を概観することにする。具体的には中国内における事例として北京市、および広東省沿海部の経済特区地域を、中国外における事例として韓国 京畿道 安山市を取り上げ、それぞれの地に暮らす在外朝鮮族の言語使用、意識がどのような共通性、特殊性をみせるかを解明することを目指す[1]。

1　北京市（북경시, 北京市［běijīngshì］）の朝鮮族人口は1982年に3,734人であったが、2000年には20,369人にまで増加をみせている（예동근 외（2008）、申慧淑（2013））。また、広東省（광동성, 广东省［guǎngdōngshěng］）の朝鮮族人口は1982年には154人であったが、2010年には18,588人となっており、120倍もの増加をみせている（国务院人口普查

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

終　章

結　論

本書では、中国朝鮮族の言語使用と意識について、独自に設定した調査の結果をもとに分析を行なってきた。本書で行なった調査は、調査対象者の特殊性など各種制約から必ずしも体系的でなかった部分もあったが、ここでは本書で得た知見を整理するとともに、今後の課題についても示しておくことにしたい。

第１章から第８章では、【言語使用編】と題し、中国朝鮮族の言語使用について分析した。第１章と第２章では、延辺朝鮮語の談話における終止形語尾の使用様相について、親疎関係や話者の属性といった社会言語学的観点から分析を行なった。第１章の分析では、延辺朝鮮語では（1）待遇法等級が概ね４等級に分布していること、（2）他方言にはみられない融合、脱落により生成された形式が多いこと、（3）咸鏡道方言や六鎮方言に起源を持つ語尾、韓国語の影響も散見されること、（4）形態は同じであっても、他の多くの方言とは異なる使用域を持つ語尾が存在することなどが確認された。このうち（1）の４等級については、略待上称や略待が多用される韓国語（ソウル方言）とは異なり、下称や上称、その他にも中称という他方言では多く使用されない等級が多く出現しているという点で特徴的であった。また、このように異なる待遇法が多く現れるという事実は、延辺朝鮮語において（2）、（3）にみられるような基層方言としての咸鏡道方言や六鎮方言などを保持した形式が多く現れるという事実を反映したものでもあり、共時態としての延

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers